

開会の辞

日本語教育センター主催 シンポジウム 2018

正規学部留学生受け入れの新時代 —多様な留学生との学びは 大学をどう変えるのか—



統括副総長、経済学部教授
池上 岳彦

○嶋原 それでは、定刻を過ぎましたので、始めさせていただきます。

皆様、本日はお忙しい中、立教大学日本語教育センターシンポジウム 2018 にご参加いただき、まことにありがとうございます。本日の司会進行役を務めさせていただきます、日本語教育センター員の嶋原耕一と申します。よろしくお願いたします。

はじめに、開会の辞をちょうだいいたします。立教大学統括副総長、経済学部教授の池上岳彦先生、どうぞよろしくお願いたします。

○池上 ご紹介いただきました池上でございます。本日は立教大学においていただき、たいへんありがとうございます。本学は、グローバル化の推進を掲げておりまして、留学生をこれからも増やしていこうと考えております。日本語教育センターは、本日のタイトルにあります正規学部留学生をはじめとする留学生の皆さんが本学の教育に対応していけるように、日本語教育に力を入れていますが、日本語教育は大学の授業に対応するためだけではないと思います。数か月前、私は日本語教育センターが主催した留学生の日本語スピーチコンテストに出席しました。そこで感じたのですが、留学生の発表者が自分の考えを話してくれると、なるほど、こういうことを考えているのかと本人のことがよくわかりますし、日本語を身につけるのに応じて日本人学生との交流も深まります。それによって、留学生にとって日本の事情がよくわかることは大事ですし、逆に日本人学生にとっても外国の事情がわかることは非常に大事だと思います。

そして、大学だけではなく、地域での生活が重要ですね。立教大学は、ここ豊島区、それから埼玉県新座市と、2つのキャンパスがありますが、特に豊島区は、



日本語教育センター員

嶋原 耕一

けるのは大変ありがたいことです。それをもっと進めるために、立教大学との連携を強めていただければ、さらにありがたいと思います。そのためのきっかけとして、本日のシンポジウムが活かされることを願っております。

簡単ですが、私からの挨拶とさせていただきます。

○嶋原 池上先生、ありがとうございます。

人口の1割以上が外国人です。中国の方が最も多いのですが、最近はベトナムあるいはネパールから、大学とは限りませんが、ともかく留学ビザで来ておられる方が増えています。そういう意味では、文化的な多様性が、特に豊島区では進んでいるわけです。そのとき、元からこの地域に住んでいるほとんどの人は日本語を話すわけですから、なるべく日本語でコミュニケーションをとることができれば、より相互理解が深まっていくでしょう。

本日おいいただいた皆様が、それぞれの国で日本語教育にご尽力されて、それが基盤となって、留学生を日本に送り出していただ